99/4/27

＊キリスト教学特殊講義１＊＊＊＊＊＊＊＊＊　　S.Ashina

＜導入＞

２－１：キリスト教の多様性と統一性

２－２：信仰

２－３：神

２－４：象徴・神話

２：宗教としてのキリスト教

1.　キリスト教を一つの宗教（内的な多様性を含みつつも一つと言えるだけのに統一性の　ある）として説明する　→　モデル化

2.[Ｓ－Ｍ－Ｏ] モデル：「ＳはＭにおいて／Ｍを通してＯを信じる」

「キリスト教徒は礼拝式において神を賛美する」

宗教現象学

3.キリスト教は宗教ではない？

個別性と普遍性

２－２：信仰

4.「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マルコ12:30）。この聖句を手掛かりにキリスト教信仰のポイントを分析してみよう。

①信仰とは全人格的行為である

cf.　「信仰＝認識」説、「信仰＝意志」説、「信仰＝感情」説

認識と意志と感情（知情意のすべて）

②信仰は究極的な事柄である

「尽くして」という語の反復　→　「究極的」　cf.　部分的、相対的

③信仰は自己同一性の問題である

「金と財産をもっている時に、自分では神とあらゆるものとを豊富にもっていると考え、　これに信頼して、高慢にも人に対して何とも思わない者が多くある。見よ、このような　人はまた、マンモンという名の一つの神、すなわち、金と財産をもっており、彼はそれ　に自分の全心をおいている。そして、かかるものは地上でもっとも一般的な偶像である。　……同様にまた、すぐれた技術・才能・寵愛・友情・名誉、をもっていることに信頼し　てそれを誇る者も、一つの神をもっているが、それは唯一のまことの神ではない」

（ルター　『大教理問答書』）

「われわれの知恵で、真理にかない、また堅実な知恵とみなされるべきもののほとんどすべては、二つの部分からなりたっている。神を認識することと、われわれ自身を認識することとである」（カルヴィン『キリスト教綱要』）

・神理解と人間理解（自己＋他者）との相関性

・何を究極的関心としているか　→　自己同一性

④信仰は信仰対象を焦点にした生の形態化である

生命：生活、人生、生命を包括する意味　→　形態化（統合の焦点）
不幸：「人間生活の大きな謎、それは苦しみではない。それは不幸である」（シモーヌ・ヴェーユ）
不幸＝形態を脅かすもの・意味の喪失、
個々の出来事を意味ある連関にまとめあげるためには、それらの出来事を結びつけ全体を形あるものとする「焦点」が必要である
ヨブの場合：　cf.　因果応報
信仰とは、「宗教的」な対象（＝焦点）による生の形態を回復
⑤キリスト教信仰とはキリストを焦点とした生の形態化である。
イミタチオ・クリスティ(imitatio christi)
「キリストがわたしの内に生きている」(Gal.2:20)
「キリストと同じ形になる」(Gal.4:19, Phil.3:21)
「イエスの死を体にまとう、イエスの命がこの体に現れる」(IICor.4:10)

＜文献＞

1．芦名定道　『宗教学のエッセンス』（北樹出版）
2．ルター　「大教理問答書」（『信条集　上』　新教出版社）
3．カルヴァン　『キリスト教綱要　I』（新教出版社）
4．トマス・ア・ケンピス　『キリストにならいて』（岩波文庫）
5．シモーヌ・ヴェーユ　『重力と恩寵』（講談社文庫）
6．ティリッヒ　『信仰の本質と動態』（新教出版社）